

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドルは短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことによりドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まっています。

米中通商交渉に関しては、交渉継続と米国の対中関税引き上げ延期により、警戒感が後退しましたが、6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となっており、これがドルの上値を抑える要因となるでしょう。

米中貿易摩擦値の警戒感は根強く残り、米国の利下げ観測が強まる中、当面は下値リスクが高いと思われますが、ドルが一方向的に売り込まれる経済状況にもなく、年後半も 107 円から 112 円程度のレンジが想定されます。

■短期展望

先週は、G20 で米中間の緊張が和らいだことを好感し、前週末よりも高い 108 台でスタートした後、じりじりと上昇 108 円 53 銭の高値を付けました。しかし、本格的な米中対立の解消にはなお懐疑的な見方も多く、次第に上値が重くなり、米長期金利が 2%を割り込むと 107 円 54 銭まで下落しました。

ただし、週末の米雇用統計が予想を上回ったことを受け、ドルは反発し、108 円台を回復して週を越えています。

今週は、米雇用統計の好結果を受けてドルの底堅い動きが続きそうです。ただし、7月利下げの織り込みに変化はないため、ドルの上値も限られると思われます。

今週のレンジは 107 円半ばから 109 円前半を予想します。